

(第二十三章)

『根本中論』の解説、ブッダパーリタ。第九卷

有（輪廻）の継続は本性が欠如すると示す＞煩惱が本性として有ることを否定する＞ [章の著述を説く]

ここで言う。

「食欲と瞋恚と愚痴は、
妄分別より起こると説かれた。
好ましい、好ましくない、誤りに、
依拠したこれより全く起こる。 1

ここで、食欲と瞋恚と愚痴は妄分別より起こると諸経部より詳細に説かれ、好ましいと、好ましくないという誤りにまさしく依拠することより全く起こるので、それ故に、食欲と瞋恚と愚痴は有るのである。」

章の著述を説く＞煩惱は本性があることを否定する＞ [縁起の理由によって否定する]

ここで説く。

好ましい、好ましくないという、
誤りに依拠して起こるもの。
それらは自性より無い。
それ故に、煩惱は正しく無い。 2

現在好ましい、好ましくないという誤りに依拠して妄分別より起こるそれらのものは、自性より無いので、それ故に、諸煩惱も清浄に有るのではない。

煩惱は本性があることを否定する＞拠所は本性として無いという理由によって否定する＞

[我は拠所として無いという理由によって否定する]

また他にも、

我の有性と無性とは、
如何様にも成立することは無い。
それが無く、諸煩惱の
有性と無性は如何様に成立しようか。 3

私の有性と無性は、如何なる様相としても如何様にも成立することは無い。その我が無ければ、諸煩悩の有性と無性が如何様に成立するとなろうか。何故かといえば、

それらの煩悩は何のものであるか。
それも、成立することは有るのではない。

それらの煩悩は何の（所有する）ものであろうか—それらの煩悩が何かの（所有する）ものであることも、一切の様相において成立することは有るのではない。

もし、何かが無ければ、何が有ろうか。
僅かな煩悩も有るのではない。 4

もし、何かの（所有する）ものであるそれらの煩悩も成立することが有るのでなければ、何かが無ければ、何が有ろうか。僅かな煩悩も有るのではない。

拠所は本性として無いという理由によって否定する> [心は拠所として無いという理由によって否定する]

『仮に、何も無く諸煩悩は有り、それらは誰のものでもない。』と思えば。

それに説こう。

自らの身体を見る如く、諸煩悩は、
煩悩を持つものに五様相として無い。
自らの身体を見る如く、煩悩を持つものは、
煩悩に五様相として無い。 5

斯様に自らの身体を見る見解（の対象）が、五蘊に五様相として有るのではないが如く、諸煩悩も煩悩を持つ心に五様相として有るのではない。斯様に、自らの身体を見る見解（の対象）は五蘊に五様相として有るのではないが如く、煩悩を持つ心も諸煩悩に五様相として有るのではない。

煩悩は本性があることを否定する> [因は本性として無いという理由によって否定する]

また他にも、

好ましいと、好ましくないと、誤りの、
 自性より有るのではない。
 好ましいと、好ましくないと、誤りに、
 依拠した煩悩は何ものであるか。 6

好ましいと好ましくないという誤りが自性より有るのではない時、好ましいと好ましくないという誤りは、正しくない。正しくないものは、有るのではなく、それら好ましいと好ましくないという誤りが有るのでなければ、それらに依拠して起こるそれらの煩悩は何であろうか。それらの因を持つ諸煩悩が、如何様に有るとなろうか。

煩悩は本性があることを否定する > [対象は本性として無いという理由によって否定する]

言う。

「色形と音声と味と触感と、
 香と法（現象）の六様相は、
 拠所であり、貪欲と瞋恚と、
 愚痴のものであると考察された。 7

色形と音声と味と触感と香と法（現象）の六相は、貪欲と瞋恚と愚痴の礎であると尽く考察され、それらの礎が有れば、好ましいと好ましくないという誤りが全く起こるので、それ故に、好ましいと好ましくないという誤りに依拠して、貪欲と瞋恚と愚痴が起こる。」

ここで説く。

色形と音声と味と触感と、
 香と法（現象）ただそれだけ。
 尋香の都のようであり、
 逃げ水や夢に似るのである。 8
 幻の人のようであり、
 映像に似たそれらに、
 好ましいや好ましくないものが、
 起こるとも、何処でなろうか。 9

色形と、音声と、味と、触感と、香と、諸法（現象）は、ただそれだけのも

の、離れた、何も無い、非混合で、自性は無く、尋香の都のようであり逃げ水や夢に似るので、幻の人のように、映像に似たそれらにおいて、好ましいや好ましくないが起こると何処でなろうか。

煩惱は本性があることを否定する>因は本性として無いという他の理由によって否定する>

[貪欲と瞋恚の因が本性として成立したことを否定する]

また他にも、

それに依拠して「好ましい」と、
「好ましくない」に対して名付けられる、
「好ましい」は、相対しておらずに有るのではないので、
それ故に、「好ましい」は合理ではない。 10

それ（「好ましい」）に依拠したならば「好ましくない」が「好ましくない」と名付けられる「好ましい」は、「好ましくない」に相対する以前に有るのではないので、それ故に「好ましい」は合理ではない。

それに依拠して「好ましくない」、
「好ましい」と名付けられる。
「好ましくない」に相対せず有るのではないので、
それ故に「好ましくない」は合理ではない。 11

それ（「好ましくない」）に依拠して「好ましい」が「好ましい」と名付けられる「好ましくない」は、「好ましい」に相対する以前に有るのではないので、それ故に「好ましくない」は合理ではない。

「好ましい」が有るのでなければ、
貪欲が起こると何処でなろうか。
「好ましくない」が有るのでなければ、
瞋恚が起こると何処でなろうか。 12

「好ましい」が有るのでなければ、貪欲が起こると何処でなり、「好ましくない」が有るのでなければ、瞋恚が起こるとも何処でなろうか。

因は本性として無いという他の理由によって否定する>愚痴の因が本性として成立したことを否定する>誤りが本性として成立したことを否定する> [常見が誤りとして、本性として成立したことを否定する]

ここで言う。「経部より恒常等の四つの誤りが有ると説かれたので、それらは有る故に、誤りとなったものも有る。そこで、無常である何かを『恒常である』と捉えることは誤りであるが、無常である何かを『無常である』と捉えることは誤りではなく、残りについてもその如くである。」

ここに説く。

もし、無常を恒常であると、
そのように捉えることが誤りであるならば、
空に恒常は有るのではないので、
捉えることは如何様に誤りでないのか。 13

もし、『無常を〈恒常である〉とそのように捉えることは誤りである。』と思えば。

それに説こう。自性が空であることにおいて恒常であるとは僅かにも有るのではないので、それが無ければ、そのように捉えることが如何様に誤りでないとなろうか。諸々の残余もその如くである。

誤りが本性として成立したことを否定する>

[無常であると捉えることは誤りではないと、本性として成立したことを否定する]

もし、無常を無常であると、
そのように捉えることが誤りでないならば、
空に無常は有るのではないので、
捉えることは如何様に誤りでないのか。 14

もし、『無常を〈無常である〉とそのように捉えることは誤りではない。』と思えば。

それに説こう。自性が空であることにおいて無常は僅かにも有るのではないので、それが無ければ、そのように捉えることは如何様に誤りでないとなろうか。諸々の残余もその如くである。

誤りが本性として成立したことを否定する > [ただ捉えることのみが本性として成立したことを否定する]

捉えるものと、捉えることと、
捉える者と、捉えられるものの、
一切は寂静であり、
それ故に、捉えることは有るのではない。 15

捉えるもの（何が捉えるか）は、行為するものになったことによってである。捉えることであるものは、事物となったものである。捉える者であるものは、行為者となったものである。捉えられるものは、行為対象となったものである。それら一切が寂滅するとは、自性より寂滅する—それらは如実にそのように、過ぎたと、過ぎていないと、歩むが考察された折に詳細に既に説いたので、それ故に、捉えることは有るのではない。

愚痴の因が本性として成立したことを否定する > 誤りを具えるものが本性として成立したことを否定する >

[具わるものは本性として無いので、具える者が本性として有ることを否定する]

誤り、あるいは正そのものであると、
捉えるものが有るのでなければ、
何に誤りがあり、
何に誤らないものが有るのか。 16

まさしく誤りか、まさしく正しいと捉えるそれらが有るのでなければ、何に誤りが有ることになり、何に誤りでないものが有るとなろうか。

誤りを具えるものが本性として成立したことを否定する > [誤りの拠所が本性として成立したことを否定する]

また他にも、

誤りとなったものに、
諸々の誤りはあり得ない。
誤りとなっていないものにも、
諸々の誤りはあり得ない。 17
誤りとなりつつあるものにも
諸々の誤りはあり得ない。

誤りとなったものに諸々の誤りはあり得ず、誤りとなっていないものにもあ

り得ない。誤りとなりつつあるものにもあり得ず、如何様にあり得ないかは、「過ぎた」と、「過ぎていない」と「歩む」を考察する章¹において詳細に示した如く理解したまえ。

何に誤りがあり得るかは、
己自身で分析せよ。 18

今何に諸々の誤りがあり得るか、己自身で尽く分析せよ。

誤りを具えるものが本性として成立したことを否定する > [誤りが本性によって生じたことを否定する]

また他にも、

諸々の誤りが生じていなければ、
如何様であれば有るとなろうか。
諸々の誤りが生じることが無ければ、
誤りを持つものは何処にあろうか。 19

自性より生じていないそれらの誤りが、如何様であれば有るとなろうか。今それらの誤りが自性より生じることが無ければ、誤りを持つものが有ると何処でなろうか。

事物は自らより生じず、
他よりまさしく生じるのではない。
自らと他よりでもないならば、
誤りを持つものは何処にあろうか。 20

愚痴の因が本性として成立したことを否定する > [誤りの対象の有無を考察して否定する]

また他にも、

もし、我と、好ましいと、
常と楽が有るならば、
我と知る、好ましいと知る、常であると知る、
楽であると知ることは誤りではない。 21

もし、「我と、好ましいと、恒常と、楽」というそれら四つが有るならば、そ

¹ 「過ぎた」…章：『根本中論』第 2 章。

れらは有る故に、恒常であると知ることと、好ましいと知ることと、恒常であると知ることと、楽であると知それらのことは誤りではないとなる。

そこでこう『我と、好ましいと、恒常と、楽というそれら四つは有るのではないが、無我等の四つはある。それらを誤って捉えるので、諸々の誤りも有る』と思えば。

それに説こう。

もし、我と、好ましいと、
常と楽が無いならば、
無我と、好ましくないと、無常と、
苦は有るのではない。 22

もし、「我と、好ましいと、恒常と、楽」というそれら四つが無ければ、それらは無い故に、「無我と、好ましくないと、無常と、苦」という四つも有るのではない。(何故ならば) 相対関係が無い故である。それ故に、この因の特性によっても、諸々の誤りは有るのではない。

愚痴の因が本性として成立したことを否定する > [そのように否定することは重要であると示す]

そのように誤りが滅したことによって、
無明は滅すとなる。
無明が滅したとなれば、
行等は滅すとなる。 23

そのように修行道によって諸々の誤りは滅すが、誤りが滅したことによって無明²が滅し、無明が滅したことによって行等の意味が滅すとなる。

章の著述を説く > [その理由である、それを捨て去る方法が本性として有ることを否定する]

もし幾らかの煩悩である
何かが自性として有るならば、
如何様であれば捨て去るとなろうか。

² 無明：無知。輪廻の十二縁起の第一。十二縁起とは、輪廻に生を受ける十二段階。無明・行・識・名色・六處・触・受・愛・取・有・生・老死。

有るものを誰が捨て去ろうか。 24

もし幾らかの煩悩であるものが自性として有り、正しく、真如であり、真実であるならば、それらは如何様に捨て去られるとなろうか。有を誰が捨て去ろうか—捨て去るとは不合理である故である。

そこでこう『諸煩悩は自性としてまさしく無く、それら自性として無いものを捨て去る。』と思えば。

それに説こう。

もし、幾らかの煩悩である
何かは自性が無ければ、
如何様であれば捨て去るとなろうか。
無いものを誰が捨て去ろうか。 25

もし、幾らかの煩悩であるものは自性として無く、正、真如、真実でなければ、それらを如何様に捨て去るとなろうか。無を誰が捨て去ろうか。(何故ならば) 捨て去られるとは不合理である故である。

煩悩が本性として有ることを否定する > [章の名を示す]

「誤りを考察する」という第二十三章である。